

資料渉猟余話

その140

今、手元に『伊那の華』と題する三冊の美術誌がある。各冊子の奥付によれば、第壹號は明治44年3月、第貳號は同年4月、第參號は大正2年10月の発行である。他に類似のものを見ないことから、たぶんこの美術誌は右の三冊で発行を終えたものと思われる。

同誌は、縦25センチ・横18センチの上質紙に、写真撮影された書画作品が掲載され、脇

一般に写真がまた高価で縁遠かった時代だけに、さぞ珍重されたであろう。この美術誌の出版元は飯田の発光堂、編者は同地の原勇馬である。発光堂は各

載る本誌には序文も跋文も無いので、出版の目的や経緯等詳しいことはわからな

明治末の美術誌『伊那の華』 〜伊那谷最初の美術誌か?〜

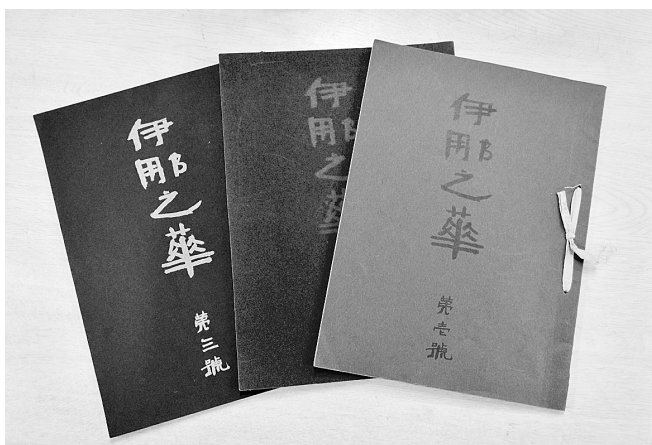
鎌倉 貞 男



発光堂主 原勇馬

掲載作品は、少数の書と工芸品(白玉香炉一点のみ)を除けば、大多数が絵画である。作品の装丁は軸装がほとんどだが、屏風も何点かある。また、当時における現存作家の作品は極めて少なく、多くが物故作家の、それも例えば相阿弥(一五五)・狩野探幽(一六〇二)・池大雅(一七三四)・谷文晁(一七六〇)・谷文晁(一七六三〜一八四〇)・渡辺華山(一七九三〜一八四二)等、各時代を代表する著名作家の作品である。

これらの作品に添えられた所蔵者名や地区名を見ると、紹介作品の多くは旧飯田市内の所蔵者所有作品である。そこへ松尾・川路・千代・



三冊の美術誌『伊那之華』(1~3号)

したのであろう。

ところで、郷土史家で美術愛好家の原彰一は私家本『養老—原家の記録—』(二〇〇二年・南信州新聞社出版局発行)の中で、この『伊那の華』三巻を「伊那谷最初の美術誌」と明言している。本稿はそれを受けて、標題としたが、果たしてどうなのだろうか。

それについては識者のご指導を俟つこととし、今回は本誌掲載の作品を考察し、そこからみえてくるものを探ってきた。

(故人敬称略)

片桐…等、周辺地域の所蔵家が混じる。更に参號では高遠・伊那・飯島・箕輪・松島等、上伊那にまで及び、文字通り書名『伊那之華』に行所に持参して撮影